

田舎に住む少女二人を襲う、終わらない監禁陵辱の目々。

田舎っ娘陵辱  
待ったなし!

ひーちん?



都会から離れに離れた田舎で見つけた二人の少女。  
それは、車の中から見るどんな大自然よりもまぶしく見えた。

あてもない中年の一人旅。  
性欲を発散する相手もない自分の脳裏に、ある考えが浮かんできた。

彼女たちを汚したい。

いけないことだとはわかっているが、一度考え出すと止まらない。  
気がつくつと、車をヒターンさせていた。  
彼女たちの泣き顔を脳裏に浮かべ、股間を膨らませながら……。



「うう………いらいです、せ、せんぱい……」

「だ、だいじょうぶだよほ○る、そ、そんな泣かないですよ。わたしも怖くなつてきちやうじやん……」

仲良く笑顔で歩いている姿があまりに無防備だったので、  
人気のない廃屋に連れ込むのは簡単だった。監禁である。

「えっと………こんなとこに連れてきて、何………」

そんなわかりきったことを。  
こんなに可愛い年頃の少女がいたら、  
おじさんは悪戯するに決まってるじゃないか。



「そ……そんな、いや、嫌です、絶対……」

「……け、警察とが、よ、呼びますよ」

そんなもの、くるわけないよ。  
この廃屋まで車で移動する間、交番、パトカーはもちろん。  
他の車でさえ目に入らなかつたんだからね。

「そ、そんな……そんなこと」

「……う、うええ……」



じゃあ、まずはおっきい娘から楽しませてもらおうかな。  
小さい娘を先輩と呼んでいたことから、こっちが年下のようだが。

「ほ、ほONEー、ちよ、ちよこと、ほONEぎんじに連れていくのー」

……小さい方はまだ結構元気があるみたいだ。  
あんまりうるさいと、おじさんも乱暴したくなっちゃうけどなあ。  
少し凄むと、先輩と呼ばれた少女はおとなしくなる。

「ひ……ひひひ」

「あ、あの……ひ、ひんすんす、しなご、んたわす……」

大丈夫、最初は痛くて気持ち悪いかもしれないけど、  
すぐに自分から求めるようになるから。



「……」

さっきから目の前のモノを見てうなっている。それはそうだろう。女の子が中年のおち〇ぽを、見慣れている方がおかしい。

「これを……こんなのを、舐めなくちゃ、いけないんですか」

もちろん。そのためにその可愛いお顔の前に差し出しているのだから。

「なんで……わたしがこんなこと……」





「れる……んっ……」

熱い息で、すでにぱんぱんになっていたおち〇ぽだったが、  
少しざらついた舌を這わせられたことで、我慢汁までがあふれてくる。

「うっ……く、臭い……あ」

未経験のコにはちよっときつい匂いかもしれないけど、  
すぐに好きになるからね。女の子はそうやって大人になっていくんだ。

「……んっ、おえ……れる」





んん、はあ……気持ちいいな。  
ほのるちゃん、ほら、こ、こっち向いて……。

「んう？ は、はい……」

ほら、僕の目を見て、しっかり……、  
うん、いいよ！ その嫌そうな顔と、涙目が……。

「はあ……、はあ……気持ち、悪い、よっ」

はあ、はあ……っ……う、出る、駄目だ。  
もう、我慢……できないっ……！





ドジュルル、ゴジュッ……

「ひ……ひ……ひ……ひ……ひ……あ、熱い」

はあっ……はあ……。ほのちゃん顔、汚れちゃったねえ。  
汚れた顔も、すごく、可愛いよ……。

「き、汚い……です！ 嫌あ……」

ほら、口元についたのはしっかり舐めとって……？  
こぼすのは、凄くもったいないんだからね。

「ふえ……うえ、そんなの、口に入れないで、ください」

全く、わがままだな。ほら、次は服を脱いで？  
壁に手をつけて……おしりをこっちに向けるんだよ。



「うあっ……… な、なんですか、あっ、さ、触らないでっ………」

………「これは……予想以上に胸の発育が進んでいるなあ！  
とても〇学生とは思えない。大きいが張りもあって、素晴らしい。」

「ん……んんっ！ やめ、やめ………えっ………？ そんな、嫌です。そっちは………」

先ほど射精したばかりだが、おち〇ぽをおま〇に「あてがう。  
もちろん、ほ〇るちゃんのはじめてを奪ったためだ。」

「い、嫌あ……やです……誰か、たすけてえ」



さあ、いくよ？ 見た目に違わぬ、大人の女性にしてあげるからね。  
おじさんは、さっきから準備万端なんだ……。

「う……うぐ……んんんん、ううう」

ヌプ……ヌプ、ヌプヌプヌプ

「う……… ったあ……… いたい、ですう………」

やっぱり初物はきつい……でも、無理矢理にじあけていく感じが癖になりそうだ。

「あっ、あが……いた、い……いだいんです………本当に」

よし、入ったね。ふう……おじさん、暴発しないようにするので精一杯だよ。



ヌプツヌプツズチユツズチユツ

「一？ うう、やめ、やめてください……！ 痛いです……そ、そんな、動かないで……！」

ぷっ！ ぷううう……！ いらよー！ ほのちゃんっ。

少しずっ、少しずっ、なじませてもらっね。我慢……っ。

「お腹が、お腹が……気持ち悪い……よう。……せんぱあ、ママあ……」

田舎道から大きく離れた廃屋に、助けなんてくるわけがない。  
……そろそろ、いいかな。もちろん、中出しだ。



びゅ、ぶゅるるる、ぶゅぶゅぶゅ

「うっうっ……… じゅあっ……… 熱いっ……… え……… 何か、出っ……… っだっ……… っだっ………」

どんなものかは知っているのだろうか。

……理解していそうな気がする。ほ○るちゃん、賢そっだから。

「嘘……抜いてください……… これ……… これ………」

赤ちゃんできちやう、のびすよねっ……… い……… せ」

お、やっぱり知っていたよっだ。田舎でもきちんと性教育は行われてらるよっだ。そっだよ。おじさんとほ○るちゃんの子が、できているかもしれないねえ。

「そ……… そんな……… びゅぶゅ、ぶゅぶゅ………」

じゅんじゅんっ、楽しいんですか……… いい加減に、うっへっだわっ………」

泣きじゃくるほ○るちゃんの胸をまさぐりながら、

中出しした後のおま○を、しゅっく、ゆったりと楽しんでおっ……… っだ。



……一度やってみたかったことを、やってみる。  
未成熟な体がコンプレックスの女の子に、やってみたかった。

「ふ、これで、いいの？ 言ひごと聞くから、怖いけど、しないですけど……」  
大人の男に免疫がないのだろうか、びくびくしていで、  
こっちの言うことはなんでも聞いてくれそうだ。

「私のおっぱい……、みら、みられ、ちやった」

薄い胸にくっついたぷりぷりした乳首が震えている。  
緊張の為かほのかに汗もかいてきており、非常にえっちな体である。

「おじさん……え、何、何するの？」





「チ………」

「ひっ………！ な、なに、くっくっけるの……！」

お、少し驚いた。生意気にも抗議しているようだ。  
こんな魅力的なちっさなおっぱい。おじさんがほっとくわけがならぬっつー。

「な、なんで……い、いた……そんなに、強く、くっくっけないで」

あんまりゆっくりしすぎても快感が薄れてしまうだけだ。  
そろそろおじさんも気持ちよくなりたい。

「……ひっ……汚いっ！ め、ぬるぬるしたのが……」

我慢汁が胸に垂れて可愛らしい。  
こんなに小さいカラダしてる癖に、随分エッチな絵面である。



「うう……なんで……なんで……。ふえ、やめてよ……」

おお……泣かせててしまった。まあ、当たり前か。こんな所に閉じ込められておじさんの相手など、心底嫌だろう。

「ほんとなら……もう、家に帰って、ご飯食べたり、お風呂入ったりしてる、頃なのだよ……」

お風呂か……。そうだね。おじさんも、「O嬢ちゃんと一緒」仲良く湯船に浸かりたいかな……。なんてね。

「……絶対……嫌です……」



よし、そろそろいいかな。」「ORIちゃん……おじさん、出すからねー！  
びゅびゅ、ビュルッ

「じあっ……！ あん、私の、むねえ……！」

「ORIちゃんのちっぱい。汚れちゃったね。  
白いローションを塗ったみたいで、テカテカだよ。」

「うえ……何、このニオイ……くさいよお……！」

そんなこと言わないでよ。……よし、それじゃあ次は、  
その可愛いお口に、おじさんのニオイと味を覚えさせてあげるとしてよっ。っ。





「……………んうー！ んぐうー！」

い、痛。こりちゃん、いくらびっくりしたからって、  
おじさんのおちおぼに歯を立てちゃだめだよ。

「んー、んんー……！」

嫌悪感より驚きの方が勝っているようだ。  
顔をはげしく揺らしているが、頭をつかんで離さないようにする。

「う、うぶう……はあ、はあ……はあ、はあ。はあ。はあ。なんぞ、こんなの、ロ……！」

こりちゃんの小さいお口に包まれながら、  
生暖かい吐息を強く感じる。



「なんで、ごんな……きたないこと、するの!? くさいです……ぬ、抜いて……」  
ジユプ、ジユププ、ズブツ

陰毛のあたりを目にしながら、嫌がる顔をしはじめたので、  
舌におち〇ぽを押し付けるように、腰を入れていく。

「んんっ！ おえ！ やめ、やめてええ……」

ほ〇るちゃんの中にも入ったことのあるおち〇ぽだよ。  
そんなに嫌がらないで……よし、そろそろ終わりにしてあげよう。

「んっ……むっ……ほ、ほ〇るっ。早く、抜いて、終わらせてください……」



びゅる、ぶゅゅゅゅゅゅゅゅゅゅ

「んんっ……？ んんんんんん……！」

深く深く口の奥へおち〇ぽを突っ込み、「〇りちゃんの喉奥へといっきに射精した。

「んぶ……んぐう……ぶうえ……！」


気持ちよすぎて一瞬視界が真っ白になってしまった。  
しかしまだ離さない。最後の一滴が出るまで、口からは離さない。

「……んぐ……んぐ、の、のんじやった……。」

私、こんなきたないの……のんじやった」

ひどく放心状態のようだ。今日は「の辺」しておいてあげようかな。





「この前は勢いで淫靡な体でバックでいたしてしまったので、今回は体をじっくり見せてもらって。○学生のおっぱいを見せる景であるおっぱいが絶景である。」

「んっ……………んっ……………んっ……………」

それをしても○学生のおま○は最高だ。締め付けもすじくくて……。  
おち、ほ○るちゃんもちょっと気持ちよくなってきちゃったかな。

「んっ……………んっ……………んっ……………んっ……………んっ……………んっ……………んっ……………」

最初「比べたら随分素直になったものだ。」

うっ、でもなんか「うっ、従順すぎるとつまらないんだよなあ。」

「○りちゃんみたいだ、すじく嫌がってくれると楽しいんだけど。」



「……………センパイ様、もうひびくじゅう………しないでください」

お、大好きなセンパイがエッチなことされるのも、嫌なんだねえ。怒った顔もツリ目に似合って可愛い。おじさん、楽しくなってきちやった。

ジュブ、スプっ！ スプツプツスプツ

「んっー 私は、私は大丈夫ですから………センパイには、センパイにはあ………」

大丈夫なんだね、ほのるちゃん、それなら「っちも遠慮なく、中に思いっきり吐かせてもらっかね。ほら、いくよ………」



ゴユルルル、ゴユルル

「あーっっっ……あああ……」

「私の中は、いっぱい、いっぱい、出してあげ……っっっ、白いのが……」

「すっっっ勢はほんのちよんのおま○が白濁液でいっぱいになってしまった。我ながらとんでもない量だ。妊娠してもおかしくはないだろう。」

「っっっっっ……お腹、気持ち悪い、ですっっ……」

「嫌だよ……あああ、はあ、はあ、ふう……ふう」

「あ、気持ち悪い。吐いてってしほんてしまったが、しばらく余韻を楽しむ。泣き顔でじっくり見るのも、らしいものだな。」

「っっっ……終わってな、早く、早く……離して……っっっ……。せんぱい、会いたいよあ」

「よし、じゃあ代わりにおいさんが会ってあげよう。」

「ほんのちよんの愛液がついたおち○ぽで、っっっっちよんの膈内を感じよう。」



……びとん

さあ、こおりちゃん……大人の女性になるうか。  
おじさんが、ゆっくり、しっかり教えてあげるからね。

「え、嫌です……いやだ……やめて……やめてやめてー」

ほおるちゃんは、もうすでにおじさんと一緒に大人になったよう。  
ほら、「こおりちゃんも先輩らしいと」る、見せないと……。

「ほ、ほおるにそんな……ひどいよ……。」  
「……怖いよ……私、大人になんかならなくて……。」

まあまあそんな「言わずに……。」  
すぐに自分から来めるよ「なるからな……。」



ニチャ、みちっ……ヌプププ、プシ……ヌプププ

「んーんううううー！」

痛くて声も出ないようだ。足のつけねが少しこわばっていらて可愛らしい。……口を大きく開けて、痛みに耐えているのかな。

「あっ……が……んう……い、いだ……らよ」

しかしなんてせまいおま○こなんだ。本当にほ○るちゃんの先輩なのだろうか。きつすぎて、「こっちも少し痛いくらいだ。

「ぬい……で……たす、けて、くだ、さい」



「……ふう、」が「〇りちゃんの、一番奥かな。」  
「っ」と行き止まりになったような感じ、子宮口だろうか。

「……んっ……んん……」

よし、それじゃあ、動きはじめるとするか。

子宮口にぶっつけるようにして、ピストンを繰り返してらる。

「うっー！ー！いだ、い……！ー！やめてっ、やめてええ」

悲鳴と泣き顔が快感のアクセントになる。  
こんな刺激的で気持ちのいいオナホール、人生ではじめてだ。

「なんで、なんでこんなことも……私が、私たちが  
何したって、言っんですか……」



君たちくらい女の子はね。道で歩いてるのを見てるだけで、おじさんたちは汚したくなっちゃうもんなの。「うやあって、ね！」

びゅ……ビュルルルっ！　びゅびゅ

「ひいー！！　ああー！　熱いよ。嫌あ。中だ、中だ  
出さないでよう……！！　やだ……気持ち悪いー！　です……！」

「○りちゃんの子宮口におち○ぽをキスさせるように押し付ける。白く濁った精液を直接お腹の中に流し込む感覚、たまらない。」

「あ、あ、あの、うわっ……赤ちゃん、どやっ……！」

そっだよ。おじさんごと一緒に可愛い赤ちゃん、作るっね……。

「うえ……ああ……うま、うま……そんなの……や」



「……………んう、で、できません、ごんなの、おかしいです」

文化祭のときにつけていたらしいので、ネコ耳を買ってきた。  
すごくほのめるちゃんに似合ってます、可愛い。

「で、出ませんってば……………そんな、お、おしつごなんて」

君は今可愛いネコなんだから、こうやっておしつごしないとダメだ。  
ほら、もっとご主人様にしっかり見えるようにして……………。

「ごんなの……………絶対、おかしい、よう……………」





「ん……んうう、っはあ」

うくん、やっぱり人に見られてると言ってくらひのだろうか。  
おじさんも実際トイレで隣に人がいると言ってくらひ。

「はあ……はあ、んっ、んっ……」

まあ、そんなレベルの話ではないだろうが……。  
顔を真っ赤にして、「一生懸命おしっこしようとしている姿が可愛らしい。

「あ、ん、やっど、おんぞう……、あ、あ……」





チヨロ、チヨロロ……

「あつ……あ、出た、あん、出て、る……」

黄金水色の液体がおま〇〇からあふれ出し始める。  
最初はゆっくりり少しずつ、だったが、段々勢いを増してきた。

「あつ……え、えつ、なんで、なんで？ と、止まり、ません」

少し酸っぱい香りが漂いはじめた。全く不快ではないので、  
思い切り息を吸い込み、ほ〇るちゃんを鼻腔で感じる。

「ああ、ふうう、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……」





「ざごと……とま、とま、り、ましたあ……」

顔は赤らんだままだが、恍惚とした表情を浮かべている。望んではいないだろうが、気持ちよくなってしまうのだろうか。

「あ……はあ、ひどい、です、こんな、恥ずかしい、おせい」

そんな顔をしておいて何を言っているのか、ほのめるちゃんも、なんだかんだで感じてたんでしょ。クセになるかも。

「そ、そんなわけ、ありません。こんな、こんなごと！  
二度としたく、ないです……」

じゃあ、本番といこうかな。こんな発情した子猫ちゃんには、おじさんがオシオキしてあげないといけないからなあ。





「ああ……うう、もう、開放してください。

家に帰して……ママ、みんなに会いたいよ……」

ほおるちゃんも「ね、好きになっってきたでしょ。

おじさんもおしっこするほおるちゃんみて、興奮しちゃっしてね。

「せいです……」

嫌です……おち○ちん、嫌ですっ」

お、よく言えました……ほら、はじめでもならんたがら。  
そんなにイヤイヤしないっ。おとなしくっ……。

「うう、そんな汚いの、入れないで……気持ち悪い」



ヌプン、ヌルルル

「しゅっしゅっ……」

はははっはっはっはっ……

また私の中にい

ふふ、ほめるんの中、ヒクヒクいってるよ。  
そんなにおじさんのおち〇ぽが待ち遠しかったんだね。

「違います……」

そんなわけ、ならんぞ……」

ネコ耳と首輪がこんなに似合う女の子も珍しい。  
おじさんも文化祭とやらに言ってみたかったな。

「はあ……はあ、

せい……」

早く

終わらせたいぞから」



お、ちょっと生意気な口をきくようになったね。  
結構結構、元気があってなにより。犯し甲斐がある。

又プツ、ジユプツジユプツジユプツ……

「うう……あー！ あんー！ あんー！ は、激し……うた」

ほのるちゃんが早く終わらせるって言ったんじゃないか……。  
それなりに勢いよく、させてもらうっ……。

「ううう、奥にっ、奥にきてますうううー……いせあ、  
私の大事なところ……壊れちゃいます……よ」

はあ……はあ……腰に打ち付けられる……  
おち○ぽを出し入れしていく。もう、そろそろ限界だ。



びゅびゅ、ビュルルル、ビュルルルッ！

「あ~~~~っ~~~~！~~~~また、またあ……  
出てますよお、私の中に、いっぱい……」

生意気なカラダしたネコ耳娘に思いっきり射精する。  
うくん、必死に体を離そうと身をよじるのもたまらない。

「んう……やだ……やだ……ひっく……もう、嫌」

ほ〇るちゃんも「〇りちゃんも、まだまだおじちゃん」と一緒だよ。  
これからもずっと、楽しもうね。ほ〇るん……。

「……その呼び方……止めてください……  
私を「ん」な「う」したくないです……」



「あの……これって、そ、その……」

せつかく田舎にきたんだから、外も歩くか、とらう「とど、こりちゃん」とたまには散歩することにした。

「だ……だれか来たら……！ もし、きたら……」

誰もきやしないって、こんな田舎の僻地に、人なんか歩いてるもんか。裸のこりちゃんは、いつもよりびくびくしているようだ。

「ど、ども……ども……」





「は、恥ずかしい……ムリ、です。うう……うううう、ふえ……」

あ、ちよっと、こんなところで泣き出さないくれよ。  
大きい声を出されると、いくら人がいなくても、ちよっと焦る。

「こんな、私、犬みたいに……おかしいよ……、  
都会の人つて、頭がヘンなんじゃないですか……」

体をふるふる震わせて、泣きじゃくっている。  
うくん、さすがにちよっとかわいそうだったかな。

「もう、満足しましたか……？」

服、着させてくれたかい」





そうだなあ……じゃあ、「ううしよう。」

おじさん、「こりちゃんに着て欲しい服を買ってきたんだよね。」

「私に、着てほしい……服？」

ちよっと着るには早い季節かもしれないけどね。  
でも、水着姿のこりちゃん、見たいんだよ。

「なんで……み、みず、ぎ……？」

うう……でも、裸よりは……」

よし、お願いしてみると急にわくわくしてきた。  
さあ、早く戻ろう。股間のモノも準備万端である。





さて、おじさんが買ってきた水着、着心地はどうかな。すごく、いい眺めだよ。予想通り、似合ってる。

「うう、水着って、なんでこれなのお」

学校指定で使われているスクール水着である。

こりちゃんの幼児体型にはぴったりだ。ほら、早くお尻を向けて。

「こんなところでスクール水着って……何がしたいんですか……」

スクール水着に興奮するおじさんも多いんだよ。

はあ、はあ……こりちゃん、とってもいい眺めだよ。





グイッ、ググ……ズプ……ヌププ……

「んぐ……んあっ…… あっあっあっあっ……」

青くサラサラとした布地を乱暴に引っ張り、しっかりと、ゆっくりと挿入していく。

「えう……いい……嫌だ……もう、嫌です……う」

ぬぶ、ヌププププ

「あっ……か、くふう……うえ……」

入ったね。やっと全部入ったね。じゃあおじさん、動くよ。









ビュルルル、ビュルル、ビュプ……

「……………?」

……………くっ、はあっ!!

予告もなしに射精してしまった。ちよっと刺激が、強すぎた。

「……………あ、あああ！ 気持ち、悪い……………よ」

こりちゃんの赤ちゃんの部屋は今、中年の精液で一杯になっているだろう。まだ射精は止まらない。なんて気持ちのいいおま○こだろうか。

「……………んう……………ん……………」

もう抵抗する気もなくしたようだ……………。くたっと力が抜けている。おじさんは水着越しにおしりを撫でながら、余韻にひたることにする。





「うう……せ、センパイ……こんな、ひどい……」

二人とも疲れていたようだったので、  
たまには会わせてあげることにした。涙ながらの再会である。

「ほ……ほ〇、る……？」

私、先輩で、お姉さんなのに、こんな、なうちやうて」

「センパイ、センパイ……うええ……」

こ〇りちゃんはもう泣きわめく元気もないようだ。

次は泣きじゃくってるほ〇るちゃんに、相手してもらおうかな。

「もう、許してください……わたしたち、家に帰りたいです」

そういうわけにはいかないよ。おじさんももう後戻りできないんだ。  
こうなったら見つかるまで、君たちと楽しませてもらうつもりだよ。

「そ、そんな……そんな……」

本当に、本当に可愛い娘たちだ。

……いつまで、この田舎娘二人と一緒にいられるだろうか。